

# 会報

〒183-8534  
 東京都府中市朝日町3-11-1  
 東京外国語大学  
 ロシア語渡辺研究室室内  
 東京外語ロシア会  
 TEL&FAX 042-330-5265  
 振替口座 00110-8-22338

## わたしの外語時代

会長 原 卓也



原 卓也会長

昭和一ヶ月生まれの子は、小・中学校を第二次大戦中、大学生生活は戦後の混乱期に送った。学校生活の変わり目にもろにぶつかった世代である。まず豊島区南長崎にある東京市立長崎第三小学校に入学校は長崎第三国民学校と名称が変わっていた。現在は椎名町小学校という。ここを卒業してすずんだのが、東京府立第九中学校であるが、昭和一八年から都制が施かれ、学校制度が変わったため、わたしは卒業した昭和三年には東京都立第九新制高等学校に変

身し、二年後には都立北園高等学校と校名も変わった。つまり、わたしは府立九中最後の卒業生であるが、同級生たちの半数近くは北園高校の第一回卒業生というわけだ。府立九中を終えたわたしは東京外事専門学校ロシア科に入学、昭和二十六年にこまえたあと、新制の東京外国語大学第四部(現在のロシア・東欧課程)の三年に編入学し、昭和二十八年三月、今度は大学第一回生として卒業した。こう書いてみると、なかなかずいぶんややこしい感じが、わたしのほうはごく普通の学校生活を送り、学校制度や校名が時代とともに変わっただけの話である。ところで東京外語という学校は、昔から建物に苦勞しつづけており、大正のはじめ神田錦町にあった校舎は大火で

全焼、引越した麹町の校舎は関東大震災で焼失、北区西ヶ原に新築した校舎も第二次大戦で灰と化し、その後あちこちに間借りや居候をかさねて来、ようやく古果の西ヶ原で全学的な授業を行えるようになったのは昭和二十六年以後のことだ。わたしが東京外事専門学校に入った時は、板橋区(現在は練馬区)上石神井にある智山中学の一部を借り、それだけでは教室が足りないの、雨が降るとどぶ川と化した狭い坂道を五分くらい歩いた所にある、東京工業専門学校(現在の東京工大)付属の電波兵器技術専修学校戦後、廃校になった跡に建てた仮校舎とて授業をしていた。仮校舎といえは聞えはいいが、窓にガラスも入っておらず、代りに貼った障子紙はびりびりに破れ(というより、われわれが破いて手あぶり用にパケツ

で燃したり、凍をかんだりしたのだ)、暖房など全くない部屋に寒風がじかに吹きこみ、その上隣りの教室の他語科の授業がそのまま聞こえてくる始末だった。窓から外を眺めれば、向かいの引揚者の寮がおむつや下着などの洗濯物がはためいており、小さな子供が泣いたり騒いだり、とても静かに勉強する雰囲気ではなかった。だから、西ヶ原の新制大学に編入学した時には、なんて広い素晴らしい校舎なのだろうと感激したものだ。わたしはA、B、Cも知らずに入学したのだが、クラスメイトの中には、陸軍幼年学校や士官学校などですでに程度ロシア語を学んできた者が少なからずおり、なかにはハルビン学院を卒業した者が、そのまま満州で通訳をしていたなどという経歴の人さえいた。外務省ソ連課長、東

現在、国策研究会理事長をしてる新井弘一君は、代表的な一例だ。また、手書きといえロシア語の名刺を作って、みなに配る者もいた。こういう連中は、わたしたちが小学生のように大きな声を張り上げて、アー、ペー、ヴェーと発音練習をしたり、すこしずつ、スタカーヌ、スタカーナ、スタカーヌウ...と名詞の格変化をおぼえたりしてい

る間、当然のことながら、なるとも退屈そうな顔でお付き合っていた。授業中、いちばんうしろの席で黙々と「罪と罰」などを、なんと原書で読んでいて、休み時間になるとロシア人教師にロシア語で質問する学生もいた。ロシア語はきわめて入りにくい外国語である。何よりもまず文字が違う。それも、東南アジアの言語のようにまるきり違うのならば、さうもつこうというものが、Cがエス、Hがエヌ、Pがエルと、字体がローマ字と同じで発音の異なる文字や、F、M、N、U、Yなどのように、初めからお目にかかる文字が入り混じっているもので面食らわされる。さうなると、一つの名詞で文法に入ると、一つの名詞が単数、複数合わせて十二通りに変化し、それにつれて指示代名詞、所有代名詞、形容詞なども同じように変化する。動詞の完了体、不完了体にも泣かされた。慣れてくれば基本的なパターンが頭に入ると、さほどむずかしくもなくなるのだが、初学者はただ機械的に暗記するほかない。ただでさえ逃げ腰になるところへもつとて、意外にはたたくおむつと、クラスメイトの「罪と罰」である。わたしはすっかり敬意を失い、教室に行くのが厭になった。わるいことに、学校に行く途中に石神井公園

がある。私は授業をサボって、毎日ポート池で時間をつぶすようになった。ポート屋のおじさんが、失恋の痛手に悩んでいる少年と勘違いして慰めてくれたほどだった。あのまま情性で怠けつづけていたら、わたしの人生はまったく違ったものになっていたかも知れない。ロシア文学や大学などとまったく関わりのない人間になっていたらどう。そんなわたしの目をさましてくれたのは、先輩のロシア文学者である王藤精一郎さんだった。当時食うや食わずでロシア文学の翻訳、研究に取組んでいた彼は、わたしが外語の一年生の夏休み、「自分からロシアをやろうと外語を選びながら、半年もたたぬうちに落伍するとは何事か！そんなことでは、何をやってても中途半端に終るぞ」と一喝してくれたのだ。憑き物が落ちた感じだった。わたしはその夏休み、必死の努力で文法書をやり終えた。秋になって辞書と首つ引きで簡単な物語などをひとりて読めるようになったら、ロシア語も以前ほど恐ろしくなくなり、なんとかモノにすることができた。勉強にせよ、何にせよ、それに打ちこむには一つのキッカケがきわめて重要なのである。(昭和28年卒。元東京外国語大学長)



# 追悼 東郷正延先生

昨年末まで東京ロシア語学院で教鞭をとられた先生が本年二月十三日逝去されました。享年93歳。心からご冥福を祈ります。

## 東郷正延先生の思い出

―特に露和辞典のこと

小沼 利英

ここに一枚の写真がある。奥様の愛子様か先生の「露和辞典」の原稿を執筆されているお姿をキャンパスに描かれたもので、机に向かって背筋をピンと伸ばされ、力強く愛用の万年筆を握っておられる。

一九九〇年三月一六日に銀座の画廊で開かれた奥様の個展で入場者の衆目を集め、その絵には「一路」という画題がつけられていた。勿論、この絵は「露和辞典」の完成する一九八八年九月の数年前に描かれたものを個展のために特別出展されたものであった。

「一路」という画題から東郷先生が「露和辞典」の出版にいかにか痛心なさっておられたかが痛いほど身に沁みてわかる。ロシア語「一路」がどんなに長い道程(みちのり)であったか、一番よくご存知だったのは当の先生ご自身ではなかったか。また、先生を脇から支えてこられた大勢のロシア語学徒の協力者と共に歩んでこられ、一身に背負わ

れたその「一路」の責任の重さもいかにばかりかと拝察する。なにせ「露和辞典」の出版企画が始まったのは一九六一年八月でそれから一九八八年九月に研究社から出版されるまで実に四半世紀以上にもわたって延々と原稿執筆と編集作業が続いたのであった。その間に学生紛争の最中の一九七三(昭和48)年に辞典の企画者

担執筆なされた。さらに驚く

究社に入社し、いわば「不肖の三代目」として仕事を引き継ぐことになった。入社当時は辞書編集の「いろは」も皆目知らず、いわば見よう見まねで仕事を覚えるしかなかった。

東郷先生は単なる編集者に留まらず、自らも原稿を執筆なされた。ロシア語字母の最初のA、B、Cの執筆を終えられたと、今度は見出し語数が目次で多いCの全ての原稿を執筆なされた上、さらに他の担当者の目の一部も分担執筆なされた。さらに驚く



「一路」 奥様が描いた先生の執筆姿

三校(場合によっては四校、五校)のゲラ刷りに磨きをかけて推敲された。辞書作りにかけては正に「超人」という言葉ほど東郷先生に打つてつけの言葉はない。

入社してからというもの、殆ど毎週一度先生のご自宅に伺うのが日課になった。先生は何事にも新しいことに新鮮な関心と興味を抱かれていた。ある日、先生のお宅にお邪魔すると、「小沼君、これがロシアからの珍珍だ」とおっしゃって書棚の奥から大事そうに瓶を抱えて来られる。見るとガラス瓶の中に紅茶が入っており、なにやらクラゲ状の奇妙な物体がふわふわ浮いている。先生はこの私にも貴重な紅茶キノコを分けてくださった。

先生はまた人一倍健康には留意なさっておられた。先生は毎朝メガネを外して起床の前の寝床で天井の節穴を眼球を左右上下に動かし、縦横無尽に数えることを日課にされ、視力回復に努めておられたという。辞書の活字は普通の書物の活字のポイントに比べて小さく、辞書の編集者はほぼ百パーセント視力が落ち、下手をすれば校正をするのにルーペを使うことにもなりかねない。先生は92歳のご高齢にならなまで白内障とは全く無縁であった。

先生はとにかく多趣味で、

何事にも好奇心が旺盛であられた。カメラの腕前はプロ級、常にライカをどこに行かれるにしても携行なさる。イタリヤ製自転車も颯爽と乗り回して多摩川べりを散歩され、よく府中の大神社や多摩丘陵まで遠出をなさっていた。

このように何事にも進取的であった東郷先生は辞書編集にも積極的にアイデアを探り入れられた。「露和辞典」で初めて類義語欄や日本語の訳語の後にロシア語のシノニムを採用されたのも先生ご自身の発想からであった。長年ロシア語教育にも携わって来られたので、ロシア語学習者が「路」に迷わないように常に清新な頭脳で学習方法については熟考されていた。一例

を挙げると、女性名詞の活用を覚えるのに、「丸い目黒い目(天使の目)」や中性名詞の活用については「拝む乙女のご来光」という語呂合わせを考案なされて、孫のような学生が一人で二人でもロシア語の「路」を外れないよう指導なさっておられた。先生はププノワ先生との偶然の出会いから「ロシア語はまるでたえなえる天上の音楽」と形容なされ、まだまだこのロシア語の魅力を存分に若いロシア語の学徒にも伝授していたたくはずであった。

ロシア語教育、「露和辞典」

の編纂に金字塔を打ち立てられた先生の偉業はソ連科学アカデミー発行の「言語学の諸問題」(БОЛГОСЛОВНИК) 31(1991)の書評欄にも採り上げられ、30頁ちかくを割いて、ロシア語の名家からも絶賛された。

27年の長きにわたって「露和辞典」の編集に捧げられ、93歳までロシア語教育の現場に立たれて生涯現役を貫かれた東郷正延先生の偉業は未来永劫燦然と輝き続けることでしょう。

ロシア語「一路」を歩んでこられた東郷先生、心よりご冥福をお祈り申し上げます。(昭和43年卒。研究社辞書編集部)

「トウゴウセンセイ」のこと

早川 徹

顔に怒色を浮かべたり怒声を発することのない人であった。長寿なのに少年の含羞を一生失わない人であった。旧外語に入ったとき、三年上級の学生がいることを知った。なぜか剣道部か柔道部の有段者と思った。堂々として武張った姓名だったからの早含意だったので、後年親しくなると



きその穏かな人柄に驚いた。心を許す間柄になったのは、彼が日ソ学院(現東京ロシア語学院)長になってからで、彼の委嘱で上級生の「ロシア・ソヴェト史」の講義を受け持つことがあった。官製の教科書を作り出し「ナロードニキ運動」の話ばかりしたが、学生に受けて合同講義をという話になった。一応院長の了解を求めたら「いいんだよ、君、それで。学生にロシアへの興味を持たせられたら」と大賛成してくれた。彼の真面目が最も発揮されたのは、官学外語大の教壇に立つては、高のロシア語教育施設になった後に日ソ学院という民間最の学校にその草創期から五十年余りかかわったということに象徴されている。学院長になってから三〇年余り彼はこの「ロシア語の松下村塾」に心血を注いだ。彼のロシア語教育への情熱は生徒のことを「子供たち」、「あの子、この子」と呼んだ処に如実に顕れていた。日ソ学院は学校企業ではなくて、彼が手塩にかけて育て上げた「大家族」なのであった。最晩年まで一週に一日初等ロシア語の授業を「楽しみ」にしていたのも、彼が戦後の学生ストで学生側に味方し名誉教授の「栄誉」を棒に振ったのと同じ精神から

発している。彼は「教官」ではなくて、「在野の教育家」だった。研究社露和辞典は学界に残した彼の大きな足跡である。岩波ロシア語辞典と並んだ斯界の二大金字塔である。が、彼は遂に身辺を飾らず名聞に囚われず、飄々たる蓬髪の村夫子であった。眼に少年の知的好奇心を輝かせ青年の高い声で笑った。放談、閑談を心底から愉しんだ。すでに名利を超えた脱俗の風格があった。ほほえましい思い出がある。新宿駅の雑踏のなかを急ぎ足で行く彼と偶々遭った。紅潮した顔には青年のような興奮と期待の色があった。ピンときたので「デートだろう」というと「ウン」と素直な少年の声が返ってきて、彼は人波のなかに急いで消えて行った。愛子夫人と婚約中のことだった。老いても初心を忘れぬ直情の人だった。昨夏信州の山荘に猛暑を避けていた間彼には忽ち十数人のファンができた。「それが、あなた、みんな若い女の人なんです」と愛子夫人が笑いながら言った。九〇を超えたトウゴウセンセイにはゲーテのような情熱と魅力があったらしい。愛子夫人との間には平穏で幸せな晩年があった。だから、病勢が革まった日彼は声を改めて「永い間どうもありがとう」と夫人に云ったそうである。彼は

最後まであの穏かな顔で幽明の境を越えて逝った。苦痛を一度も訴えなかった。こういう人を「運筆微笑れんげみしよ」の二人というそうである。(敬称略)  
 (昭日年卒。元読売新聞モスクワ支局長・外報部長)

思い出の東郷先生

古茶 兵衛

今年(戦後57年目)私が東郷先生に初めてお目にかかったのは、戦後2年目、即ち半世紀前のことである。今も目に浮かぶあの頃の先生はペーリュウのレインコートに召して西武電車の吊り革にゆられて立っておられる、学究らしい秀でた額、黒縁の眼鏡の中の静かな優しい瞳、当時30代の後半であられた筈なのに、もう少し落着いた印象で不思議にそのお姿は晩年に至るまで殆ど変わる事が無かった。上井草の麦畑の中に立つ木造、ベニヤ板の飯炊舎の中で先生とご一緒にプーシキン、トルストイ、ツルゲーネフ、ゴリキー等の作品やロシアの童話を讀んだ。先生の独特の美しいイントネーションはまるでマホーのように、バラックの教室をロシアの大地の匂いのたちこめる草原に変え、宮殿に変え、或いは雪深い山里

のイズバーに変えた。終戦直後、誰もが持っていた飢餓感、復興へと立ち上がる強烈なエネルギー、それと裏腹に焼け跡の巷に行き交う人々の悲哀感、そうした中にあって先生の教室は別天地であった。私は先生への憧れからお宅を訪ねたことがある。横濱育ちで東京の地理に暗かった私がどのようにしてお宅を訪ねたかは定かでない。唯おほろげな記憶の中では、それは東京郊外の武蔵野の一角に立つ平屋の一軒家で、傍らに木立に細い流れがあった。玄關に立つと中から楚々とした奥様が出て来られ、先生は生憎ご不在とのことであつた。すぐ帰ろうとする私を押してどめて奥様はお茶を入れて下さった。紺の学生服の私に親しみを持って頂けたのか、奥様は、先生が終戦まで幼年学校の教官をなさっていたこと、戦後、軍関係者に対する世間の風向きの急激な変化に戸惑われた事等を話して下さいました。

「東郷はね、休みの日、お天気が良いと庭に机を出して勉強するのですよ。勉強してないかと直ぐ周囲の人に追いつかれてしまつと申しましてね」と雑木林の中の平坦な場所を指さされた。木漏れ日を受けながら落ち葉の庭で孜孜として研究に時を忘れる先生のお姿が見えるようで、一層親しみの深まる思いであつた。先生とは時々西武車で一緒にになった。その頃私は平岩米吉の「狼の話」、「犬の話」など動物文学にのめり込んでおり、犬のオリジンのジャッカールから始まって世界中の犬の話を得々と語つたものである。電車に揺られながら、終点まで犬の話ばかりではたまつたものではない。それでも先生は温顔に微笑を湛えてこの独りよがりの学生の話聞いて下さった。後年、何十年振りにお目にかかったとき先生は「君は昔サバカの話をよくしてくれたね」と懐かしそうに微笑られた。先生の貴い頭の片隅に私の古い話などが居場所を与えられていた事に感激したものである。ここで先生の謙虚な性格について触れたい。先年ロシアより友好勲章を贈られたが、その祝賀会において、先生は次のような要旨の挨拶をされた。「私がこのような榮譽に浴する事は過分なことであるが、自分が今まで一隅を照らし続けてきたささやかな努力に対してということなら納得してお受け出来る。」私は先生を恩師としてはもとより、人生の師とも仰いでいた。90歳を過ぎてなお現役で教壇に立たれ、写真など趣味の分野でもエンジンヨイされ、常に若者のように颯爽と歩まれるお姿に己の将来も斯くありたい理想の姿として重ね合わせていた。先生が少なくとも白寿を過ぎてお元気でなおお祝いを確信して数年先のお祝いを夢見ていたのに、嗚呼。(昭25年卒。ロシア会副会長)

東郷教官の思い出

中島 愛悦

昭和十九年四月、東京都南多摩郡横山村(現八王子市長房町)の台地の下に東京牛込の戸山ヶ原から引越したばかりの東京陸軍幼年学校。十萬坪の広大な敷地の中心部に新築された教舎。木造バラック建築の簡素な建物であつた。将校服と同じカーキ色の文官服の東郷正延教官が細い鞭を持って教壇に現れ、密近に掲げた掛け軸の絵を指して「スタカ」と発音。生徒もそれを発音させられた。指された絵は「Копь» стаканであつた。続いて「ストール」と机の絵を指して、数回発音した。ロシア文字はまだ教わっていない。耳から言葉を感じるんだなと思いつつ生徒は教官の指す絵を見ながら発音した。(4頁3段めににつづく)



# 千野榮一先生を悼む

金指 久美子



千野榮一先生

千野先生が亡くなられてから既に半年以上が過ぎようとして、どうもまだ実感が湧かない。入院中もベッドの上で精力的に原稿をお書きになっていたと聞か(そんなふうが)んばつてしまふところがいかにも先生らしい)、その証拠に先生の死後も訳書や著書などがつづきつぎと出版されているからか

もしれない。それに、先生はいつお目にかかっても流刺としていた。確かに、ここ二、三年は体調がすぐれず入院を繰り返していらしたようだ。でも、チェコ語弁論コンクールの審査員は毎年引き受けていらしたし、その折にお目にかかると、いつもの歯切れのよい「千野節」を聞くことができた。その印象は二十年ちかく前、言語学を、古代スラヴ語を、チェコ語を習っていた

頃と最後まで変わらなかつた。ロシア語を専攻していた私がスラヴ語学に興味を持ち始めたのも、先生の授業がとて魅力的だったからである。とにかく話題が豊富で、授業内容に関連しているいろいろなエピソードを話してくださいました。そのお話のおもしろさについてひきこまれて、専攻を決めた人は少なくないはずである。

八月の末、プラハへ行った。ウルタヴァ川が数百年ぶりの大氾濫をおこして、町、10日ほど経つていた。町の中心部は一見被害から立ち直つたように見えたのだが、地下鉄の駅や川のそばの住宅や店舗からポンプで水をくみ出す作業がまだ続けられていたし、傷んだ家財道具が道路脇に点々と積み上げられていた。そんな町の中をあちこち歩き回りながら、ふと思つた。千野先生は大好きなプラハがこんな目に遭つているのを知ることなく、亡くなつてしまつたのだなあ、と。これから先、なにかがある度にこのような思いを重なることによつて、先生が亡くなつたことを受け入れてゆくようになるのだから。

(3ページからつづく)

生涯における初めてのロシア語との出会いであった。続いてロシア語のアルファベットを習い、単語の綴りを覚え、そしてロシア語では、名詞が単数、複数合わせて十二通りに変化すると聞かされ、一斉に嘆息を發した。更に動詞と形容詞の語尾変化も覚えなければならぬと知り、絶句した。

英語の教育も一年乃至二年、受けたばかりの生徒たちであった。ロシア語教育は、生徒の希望からではなく、学校が一方的に決定したものであった。日本の仮想敵国とされてきたロシアを知る上では、将来の陸軍の将校としては欠かされない教育とされていたらから教官も熱心であった。

多摩御陵の東隣にある学校は、武蔵野の西端に位置していた。歩いて三分とはかからない宿舎の生徒舎二階の自習室では、夜七時から二時間の自習時間が一日の学習の準備と復習に費重なじかんであつたが、ロシア語の復習、予習にはかなりの時間を割かなければならなかつた。

B29の東京空襲の侵入コースの直下にあつた学校では、警報下で野外で授業を受けることもあつたが、終戦の八月、学校はB29の集中攻撃で全焼、教科書もノートも灰になつて

しまつた。

だが、戦後、ロシア語の魅力が忘れられず東京外語に進み、再び東郷教授の教えを受けることになつた。それから五十年。卒業後、記者活動に入り、ロシアについての取材で、折りにふれて東郷教授の教えを仰ぐことが続いた。いつも疑問には懇切に答えてくださる教授だった。私のロシア研究に対する意欲を支えてくださったのもこの教授の変つて思つている。

東郷先生は老けない、いや歳をとることに若返つていく、とどつた。パリケード・ストライキにはいる直前の授業時間(もちろん授業などなく、毎回討論だった)に、先生が子供のようになつて、先生が冊かの写真アルバムを私たちにみせられた。「東大全共闘のスナップ写真ですよ。よく本郷にでかけては写しているんです」と先生は無邪気に言われた。そこには「造反有理」のタテ看板やパリケードの上を渡る各セクトの旗、ヘルメットに覆面姿の学生が写つていた。その時の先生の胸裏にはなにが去来していたのか。おそらくストライキに向けて左傾化を強めていた、ご自身の学生時代の外語の雰囲気を感じ出されていたのではあるまいか?

## 巨星墜つ

東郷正延先生の死を悼む

渡邊 雅司

外語の学生は、二年生になるとあの分厚い研究社の露和辞典を使うようになるので、毎年編者の東郷先生のことを、話題にすることに。なによりも学生が驚くのは、東郷先生が存命であるところか、90歳をすぎたなお東京ロシア語学院院长であり、しかも授業を担当されていることだった。そのことを話す私自身、先生、と強靱な精神力にいつも畏敬の念を抱くのだった。

そのことをはじめて知らされたのは、チェコ事件の直後の授業のときだった。数人のゼミ形式の授業だったが、それをつぶして討論会にしてくださいました。それまでの先生の謹厳な授業態度では、とても考えられないことだった。そのとき先生がどんな話をされたかは残念ながらおぼえていない。ただ先生が語学のことばかり考えているひと(当時の私たちは不遜にも外語の先生とはそういうものと思つていたので)ではないのだという感覚だけはしっかりと刻み込まれたのだ。その翌年、外語は全共闘運動に突入する。蟹工船帰りの私は、とまどいながらこの運動について行つたのだが、驚いたのは東郷先生が全共闘支持のいわ

ゆる造反教官に名を連ねたことだった。パリケード・ストライキにはいる直前の授業時間(もちろん授業などなく、毎回討論だった)に、先生が子供のようになつて、先生が冊かの写真アルバムを私たちにみせられた。「東大全共闘のスナップ写真ですよ。よく本郷にでかけては写しているんです」と先生は無邪気に言われた。そこには「造反有理」のタテ看板やパリケードの上を渡る各セクトの旗、ヘルメットに覆面姿の学生が写つていた。その時の先生の胸裏にはなにが去来していたのか。おそらくストライキに向けて左傾化を強めていた、ご自身の学生時代の外語の雰囲気を感じ出されていたのではあるまいか?

自転車に乗り、ブジョーのロードレーサーで毎日多摩川べりを30キロ走つていると聞かされたのは、先生70代の頃。それからはお会いするたびに若やき、いつの頃からか、語学をやるひとは長生きするといふ神話が私のなかで生まれていた。和久利先生の追悼文でも書いたが、文字どおり先生は生涯現役をつらぬかれたのだ。合掌。

(昭44年卒。東京外国語大学教授総合文化講座ロシア社会思想史)



### 好評だったロシア語劇「かもめ」

(二〇〇一年度外語祭から)

荒川 佳織

語劇の最初の話し合いで、18人が有志として集まった。演目はチェーホフの「かもめ」に決まった。亀山先生に手伝って頂きながら、台詞を約半分の量までカット、切り貼りして、夏休み前には台本を配ることができた。市販の「かもめ」の台詞を吹き込まれたカセットテープやモスクワ芸術座の公演のビデオをダビングして皆に配り、夏休みは各自自主練という形をとった。

夏休み中にほとんど全体練習をしながら練習が響き、私たちは10月から猛スピードで練習を重ねていかなければならなかった。役者は、どの役も台詞が相当あり、それに演技をつけなくてはならない。土日のどちらかは必ず学校で全体練習を行い、平日は毎日、空き時間と放課後に集まれる役者は必ず集まって練習した。週に一度、役者たちはガリーナ先生から発音のご指導を頂いた。トリゴリン役の平野君が高校時代に演劇経験があり、役者の演技指導をしている間、スタッフは四、五人という少ない人数で衣装、音響、照明、小道具・大道具すべてをこなしていた。

語劇の本番の舞台を使う時間がほとんどなく、一幕の劇中劇の仮舞台のレースカーテンを天井から吊り下げるのははみんまで試行錯誤した。音響も本番用の機械を一度しか使えず、ほとんどぶっつけ本番だった。役者も実際の舞台の距離感や照明のあたりに注意して演技しなければならず、とても苦労していた。特に練習したシーンは一幕の劇中劇、二幕、四幕の二ーナとトレブレフのシーンだった。演技力の問われる、台詞のタイミングや小道具の扱いの難しいシーンだった。これらのシーンの役者の揃う日は必ず練習し、演技は段々とよいものになっていった。

本番は外語祭最終日ですべての語劇の大トリだった。客席は満員。みんな大緊張の中、舞台は大成功に終わった。特に一幕の劇中劇と三幕は迫真の演技だった。いらした先生方からも褒めて頂き、「東京外語会会報」94号の外語祭取材記事では「モスクワ芸術座の舞台にも似て、物静かなセリフ、風の音の音響効果も巧みに使いながら、チェーホフドラマ特有の細やかな感情の髪を見事に表現している」との評を頂いた。途中、多くのハプニングがあったが、本番は素晴らしく、カーテンコールの皆の笑顔はとて

れいだった。(ロシア語専攻三年)

舞台をうけて



### キャスト

- トレブレフ 藤林宏則
- 二ーナ 三浦恵里
- アルカージナ 田之倉由佳
- トリゴリン 平野高志
- マーシャ 小出悠希乃
- ソーリン 遠藤啓史
- シャムラーエフ 遠藤光哉
- ポリーナ 福田 夏
- ドールン 小林太一
- メドヴェージェンコ 佐野重利
- ヤークコフ 岩場伸吾
- スタッフ スタッフ
- 舞台監督・企画代表・広報 石川恵通子
- 演出・音響 荒川佳織
- 衣装・照明・小道具・大道具 木下祐子
- 字幕 宮本亜希子
- 会計 井上聡子
- パンフレット 伊藤亜衣子

### 会計から

ロシア会の会費は毎回もお知らせしている通り、年会費二千円(振込料70円)または終身会費三万円(振込料120円)となっております。納入頂いた状況は左表の通りで、ご支援の感謝致します。しかし、納入人数は毎年減少の一方で、現状以上にロシア会の活動を強化する方向にはありません。一般的に、外語でロシア語を勉強された卒業生の皆さんはロシア会をどう思っているか。私自身については金融界ですし、ロシア語が役に立つ仕事についていた事はありません。今では折

角勉強したロシア語もほとんど忘れてしまったようです。しかし、それでもロシア会の皆さんと話をしておれば、外語時代の多感な自分を思い出しますし、形の上で役に立たなかったロシア語の勉強をした事が、その後の人格形成に影響を与え、実社会での地位や資格を得るために必要な過程であったと思えるのです。そう考えるとロシア会を応援する気持ちも自然に湧いてきます。色々なお考え方がありますが、色々とお考え方があれば、どうかロシア会の維持発展のため、会計上のご支援を宜しくお願い申し上げます。(追伸)終身会費、または、

二〇〇一年度終身会費納入者(卒業年次順・敬称略)  
東郷正延、松岡 滋、相馬守  
嵐、川野辺敏、島津朝美  
榎岡良之、小野池良介、小松繁範、片岡 護、朝妻幸雄、柿本和子、白壁正弘、山崎博子、  
神山孝夫、岩崎弘子、新藤伸恵、十川晶文

以上

### 東京外語ロシア会2001年度収支

(2001年4月1日～2002年3月31日 単位 円、監査実施済)

1 収入	終身会費 (17名、単価3万円)	510,000
	年会費 (90名、単価2千円)	225,000
	寄付 (2件)	40,000
	利息収入	2,337
	合計	777,337
2 支出	会報作成費(印刷製本他作業代)	198,609
	会報ラベル(支払先 外語会)	19,360
	会報郵送費	146,764
	葬儀用生花代他(東郷、和久利先生)	34,108
	懇親会への補助	163,590
	雑費(払込手数料他)	6,609
	合計	569,040
3 差引計算および繰越金	差引剰余金	208,297
	前期繰越金	3,294,402
	次期繰越金	3,502,699

### ロシア会懇親会収支(2001年11月24日実施、単位 円)

1 収入	出席者会費 (7千円×40名)	280,000
	本会計からの補助	163,590
	合計	443,590
2 支出	料理代(支払先 外語生協)	401,000
	飲み物代(支払先 村野商店)	41,960
	雑費	630
	合計	443,590



# 最近のロシア経済事情

江頭 寛

## ロシア経済の成長

ロシアに最近行かれた方はご承知のとおり、ロシア経済は停滞に悩む日本とは対照的な成長ぶりである。モスクワの街は華やかな色彩、ネオンに彩られ、かつてのソ連時代のくすんだ陰気さは郊外に出ないとなかなか感じ取ることができない。もともと地方都市に行くともまだソ連時代の重苦しい雰囲気は濃厚に感じられる部分もないではない。

数字的にはことしのロシアのGDP(国内総生産)の伸び率は三・六%と予想されているが、金外貨準備高も四〇〇億ドルを超えて史上最高というのだから、確かにロシアはいまふところ事情にやや余裕が生まれてきた状況であり、これこそ四年前には予想もされなかったロシア経済の姿である。

## 四年前の金融危機

というのは、一九九八年、ロシアは金融危機で西側への融資返済ができなくなり、いわゆるデフォルト(債務不履行)の状態に落ち込んだからである。それは九一年のソ連

崩壊以来ロシアが市場経済導入を標榜して進めてきた経済改革の一つの帰結だった。ロシア政府はIMF(国際通貨基金)の指導のもとに非常に利回りの良い国債を発行し、それによって外国からの金融市場への投資ブームが起きたのだが、政府はほとんど借金地獄に落ち込んでしまい、ついに財政が破綻してしまった。同時にロシアの商業銀行も同じ運命をたどることになった。

## 天佑の石油価格上昇

ところが、その後のロシアには国際的な石油価格の上昇がそれこそ天佑となった。翌々年の二〇〇〇年にはもうロシアは大幅な貿易黒字を記録し、製造業その他の国内経済は活気を取り戻した。なんやかやとは言ってもロシアは資源大国、西側の経済が停滞色を深める中でロシアは石油の輸出代金であつという間に立ち直ってしまつた。

## プーチン政権の経済政策

二〇〇〇年春から現在のプーチン政権に移行したのも大きい。ご存知のとおり、大統領

は元KGB(国家保安委員会)のドイツ工作員で、あまり経済には強くないと見られていた。彼の国内での人気の源泉は「テロとの闘い」と称して南部のチェチェン共和国に攻め込み、独立を目指していた同共和国をロシアに取り戻したことだ。しかし経済政策ではプーチン政権は驚くほど改革的で、かつ実利主義的な傾向を濃厚に打ち出している。

経済政策の主役はもちろんカシヤノフ首相でロシアにとつては重要な西側との融資交渉の専門家として財務省のテクノクラートだった。クドリン財務相、グレフ経済発展貿易相はプーチン大統領と同じジャンクトベテルブルグ出身者で、現在電力独占企業社長のを務めているチュバイス元副首相の影響を強く受けている。チュバイス氏はロシアの強引な民営化をやつてのけ、改革路線の中心人物として西側からの信頼が厚い人物で、いまでも陰でプーチン経済政策をコントロールしていると思われる。

## プーチン政権の実利主義

プーチン政権の実利主義はイランやイラク、北朝鮮朝鮮民主主義人民共和国といった、米国アッシュュ大統領から「悪の枢軸」呼ばわりされる国々とも緊密な関係を保っている

ことに現れている。これら「ならず者国家」とも呼ばれて国際的に疎外されている国々はロシアにとっては無競争で武器売却商談が成立する顧客だからである。

たとえば北朝鮮である。この飢餓に苦しむ北東アジアの最貧国とは九十年代関係が冷却化していたのだが、プーチン政権はこの国に大きな利権の可能性を見いだした。ソ連時代から発電所や工場施設などは北朝鮮に供給しているのは、その更新も含めて北朝鮮はロシアからの工場施設購入を将来も必要としている。ところが北朝鮮にはカネがないし、ロシアも融資供与する余裕はない。そこで先ず韓国に北朝鮮に資金供与できないかと話を持って行って韓国の同意を得、二〇〇〇年六月に歴史的な南北朝鮮首脳会談を実施させた。

そしてロシアは北朝鮮に日本とも国交正常化交渉を急ぐよう促し、拉致問題で率直に謝罪させるよう裏で北朝鮮を謝罪させた。そのねらいは日朝間の国交正常化後、日本が過去の清算として北朝鮮に支払う数十億ドルの補償金だ。日本が支払うカネは北朝鮮がロシアから買う資材の代金としてロシア極東地域の経済をおおいに潤すことになる。

## 米国との協調

この実利外交の最たるものがプーチン政権の米ブッシュ政権との間の「対テロ同盟」構築ということになる。ことし五月モスクワを訪問したブッシュ大統領との間で「米ロ戦略攻撃兵器削減条約」に調印したが、それまでのロシアの主張のほとんどが退けられた。ロシア軍部にとっては屈辱的な内容だった。しかしその代わりにプーチン政権は米国が本格的にロシアとの経済協力に乗り出すという「果実」の部分に賭けた。

その後ロシアからの初めて石油の対米直接輸出が実現し、米自動車メーカーのフォードがサンクトペテルブルグ郊外に工場を開設するなどの動きがはじめている。実際ロシア経済は立ち直つていると言っても米国の協力なしには将来はおぼつかないのが現状。命綱の石油にしても今後採掘を継続するには米国からの採掘技術導入なしには難しいし、いわゆる軍産複合体の武器輸出の国際競争力維持にはできるだけ米国の電子技術、レーザー技術など取り入れないとやっていけない。だからロシア経済の将来は米国との協力関係にかかっていると一言しても過言ではない。

## 懸案のWTO加盟

そしてロシアが現在目指しているのはWTO(世界貿易機関)の一四五番目の加盟国になることである。中国が先に実現していることなので、見容易に見えそうなのだが、そうではなく、ロシアは加盟の条件として自動車や電気製品の輸入関税引き下げ、国内の石油・ガス価格の引き上げ、通信・金融サービス事業の開放、農業補助金の撤廃などを要求されて対応に苦慮している。いずれも国内に大きな反

対勢力がいるからだが、なんとか説得して二〇〇三年秋にはWTO加盟を実現させるつもりである。それによってロシア経済もまた一歩西側に近づくことになる。

## 新興財閥について

最後に九十年代ロシアの経済を牛耳つたオリガルヒと呼ばれる新興財閥について述べておこう。彼らは自己の翼下にあるマスコミの力で九六年にエリツィン前大統領を再選させるほどの政治・経済的な影響力を誇っていたが、プーチン政権の下ではあまり政治に口出しすることなく表向きに従順の姿勢を貫いている。

これには現政権が発足後すぐグシンスキー、ベレゾフスキーという二人のオリガルヒ



の象徴的存在だった人物に対し汚職や資金洗浄疑惑で告発し、彼らが外国に逃れると言う厳しい姿勢を見せたことが大きい。結果両人の影響下にあった主要テレビ局などは国家支配に戻り、ロシアのテレビからはほとんど政権批判が消えてしまった。

しかしベレンツフスキー氏などは海外から親しい経済人や政治家を操り、いまだにロシア経済に大きな影響力を行使している。アルミニウム、石油、自動車産業などはベレンツフスキー系が主導権を握っている。若いオリガルヒも力をつけており、ロシアでオリガルヒの時代はまだ終わっていない印象がある。

(昭和45年卒、日本経済新聞編集委員)

### 進めモスクワ!

— 外国人から見たモスクワ

田村 雄

9月11日の同時多発テロで幕を開けた僕のモスクワ生活。ロシアもこの一年揺れた。テロを引きずった冬季五輪での審判騒動は、ロシア人の反アメリカという火に油を注ぎ、4-5月には、スキンヘッド、ネオナチズムが近年になく強暴化した。丁度そのころ、レーベジが不可解な事故死を遂げ、6月のサッカーW杯では、モスクワの中心地トベルスカヤ通りで若者達が暴徒と化し、日本人にも衝撃を与えた。そんな一年だった。

見ていて客観視せざるを得ない出来事や目を疑う光景。モスクワの実生活は、それまで憧れと期待を強くもってロシアをみつめていた曇った僕の眼鏡を少し磨いてくれた。



一緒に来た留学生たちと  
前列右手を上げている人の向かって右隣が田村さん

アメリカ・ガヴノー(アメリカのくそつたれ)と言いきるロシア人。そこにあるのは、自国への誇りだけではなく、盲目的な大国意識と得体の知れぬ愛国心があるのを感じる。その割りにマクドナルドはいつどこでも大盛況、金持ちはベンツやアウディを乗り回す。欧州の一員であることを強調するロシア人の言葉、それは裏腹に西欧諸国の人々の目からみれば、それはただの羨望の眼差しと感じてしまう状況。「自国への誇り」、「大国意識」、「ヨーロッパの一員」。この3つの言葉が、僕の中で交錯し合う。

寮で一緒だった中国人と話した時のことだ。彼は、ロシアの大学で法律を学びながら

露系の貿易会社で働き、ロシア在住5年になる。彼はきっぱりと言う。「この生活は懲り懲りだ。中国では今、毎日でかいビルが1階ずつ造られていく。ロシアは? 現状を変えようとする意識が一人一人にない。時には、外の世界を見るのにも必要なのに。」彼の言葉には、いい加減なロシアへの期待はない。僕もこの見方には賛成だ。大国意識が、ロシアの行く先を阻んでいるかのようである。また、ロシア人は保守的な人間なのだろう。いや新たなものへ変える術や環境がないのかもしれない。いつになったら、ぐうたらなカフェの接客はかわるのか。(笑)

ロシア人の保守性といえは、芸術にも言える。帰国間際、フランス人の友人を訪ねパリに行った。ロシアもフランスも芸術を愛する国、その歴史や厚みは広く知られるところ。ただ、それを捉える人々の目は両者で違うようだ。ペテルブルクの話はいま抜きにして、大抵のモスクワっ子は古典どっぶり。舞踏が好きで何十回とモスクワでバレエを観にいったが、彼等の反応は、極めて単純。「白鳥の湖」「ジゼル」、いわば古典作品では、客席は埋まるのに現代舞踊となると、閑古鳥が鳴く。音楽や絵画の世界でも、古典偏重の傾向が根強い。彼等の芸術への好みや価値観が多様でないとも受取れる。「新しいものに積極性がない」と、そのフランス人は言う。パリのギャラリイで見たのは、パリっ子たちが芸術に自由奔放に向う姿だった。作品の捉え方は、それを見つめる人の数だけあるのだ。芸術を成長させるのは、創り手だけでなく受け手も大きな役割を担う。モスクワの芸術の将来はどうなるのだろうか、そのフランス人と話しながら感じた。

客観視したところに見えてきたのはなかなか前に進まないモスクワの姿だった。ただ、

全く前進しないとも思っていない。世の中を変えようなんて意識しないけれど、自然に新しいものを外からも受け入れる若い人たちの存在があるからだ。若者が集まるクラブやカフェバー。その雰囲気は、多種多様で自由だ。そこで流れる音楽も、ジャンルや国籍を問わない。

ロシアは刻々と変わっているとは言われるが、人々の意識構造がすぐに変わるわけではない。幾ら新しい建物が建てられようとも、ソ連崩壊後10年余りでそれが変わるのには難しい。環境も整っていないのが現状なのだ。勿論、変わることがいいと言っているわ

十月になってロシア各地から一年以上の留学を終えて学生たちがどどどと帰ってきている。ネオ・ナチの東洋人狩りの噂も流れたが、幸い全員が無事に帰国したことに胸をなでおろしている。そんな学生たちと近くの居酒屋でビールをくみかわしながら、体験談を聞くのは楽しい。私たちの若い頃にはそんな可能生は皆無だったから尚更だ。彼らはロシア語の運用能力はもろろんだが、若さの特権で世界中から集まる留学生と交歓し、率直に議論する中で自分たちのロシア観の一面性に気づかされているようだ。それは世界認識の変更を迫るものにもなるだろう。今のロシアの変化のスピードは驚くほど速く、しかも多面的だ。だから一つ分野の知識だけでロシアを語ることは危険です。と、学生から聞かされ、はっとさせられたのだ。



スターリン生誕記念日にルビヤンカ駅近くで行なわれたスターリン主義反対運動の会場に置かれていたプラカード

### 当世ロシア留学事情

渡邊 雅司



# 二〇〇二(平成十四)年度 ロシア会総会・懇親会の お知らせ

今年のロシア会総会・懇親会を左記の要領で開催いたします。一年に一度の集まりです。お誘い合わせのうえ、多数の方がご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

日時 11月23日(土)

午後1時30分から総会  
午後3時から懇親会

会場 総会は研究講義棟一階 一〇七号室  
懇親会は学生会館一階食堂

総会の席上次の講演があります

講演 「ブーチン政権のテロとの闘い」  
講師 江頭 寛氏(昭45年卒)  
(日本経済新聞編集委員)

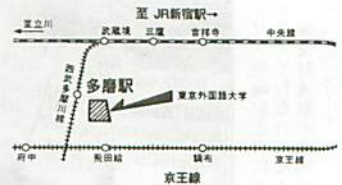
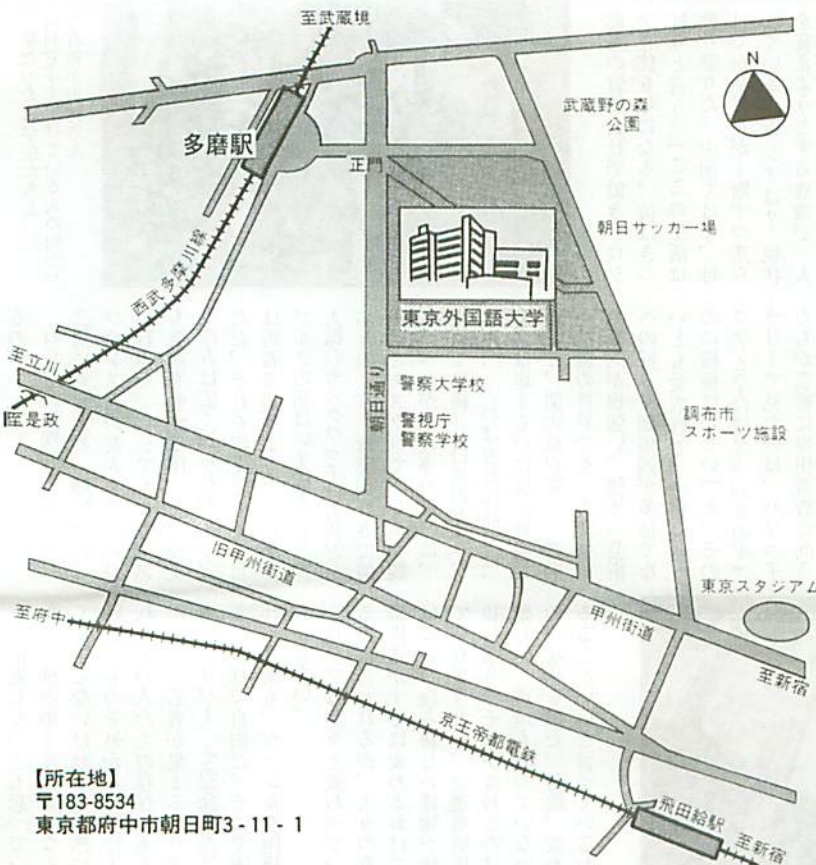
懇親会ではロシア民謡研究会のアトラクションもあり  
ます

会費 五千元(学生は千円)

なお、当日は外語祭の期間中です。ロシア語劇はロシア会の当日午後6時から、ブルガーコフの「ゾイカの部屋」を学生会館大集会室で上演します。

## 東京外国語大学案内図

西武多摩川線多磨駅下車徒歩5分  
改札口(一ヶ所)を出て左に少し歩くと地下道があります。地下道を渡って道路に出ると前方に研究講義棟の上部が見えます。  
京王線飛田給駅からは徒歩25分、タクシー利用で5分  
東京外国語大学前で停まるバスもあります



【所在地】  
〒183-8534  
東京都府中市朝日町3-11-1

## 編集後記

ロシア会が年に一回ではありますが、再び定期的に開かれるようになったのは、一九九七年の東郷正延先生の卒寿をお祝いする会からでした。他のご都合とぶつからなければ先生は府中キャンパスで開かれたロシア会にも出席されましたが、ご病気のため、今年二月に逝去されました。三月には言語学を講じられ、ロシア・東欧課程チェコ語専攻の初代教授でいらした千野榮一先生がご他界され、本号は両先生の追悼号となりました。

一昨年のロシア会での和久利先生のご挨拶について昨年本欄に書きましたところ、高橋達男様(昭30年卒)が録音していらつしやう、ダビングしたテープを下さいました。貴重な記録ですし、出来たらテープをおこしてご希望の方にお渡しできるようにしたいと思いつつ、まだ果たせないうです。

最近のロシア事情について日本経済新聞の江頭寛氏、帰国したばかりの院生の田村雄さんから寄稿頂きました。

住所変更などのため、この会報が届かない方がおると存じます。そのような方をご存知の方、渡邊研究室(一頁に住所・電話を記載)にお知らせ下さい。(Y・M昭34年卒)